

ジュニア世界選手権大会（JWOC2002）報告

SQUAD 強化部 尾上秀雄

今年のJWOCはスペインのアリカンテ市で7月8日～14日に開催された。日本からは、男女各6名の代表選手と4名のオフィシャルの計16名が遠征し、35ヶ国からの300名近い選手を相手に戦った。ここでは各レースの経過および結果を関連トピックスと共に報告する。

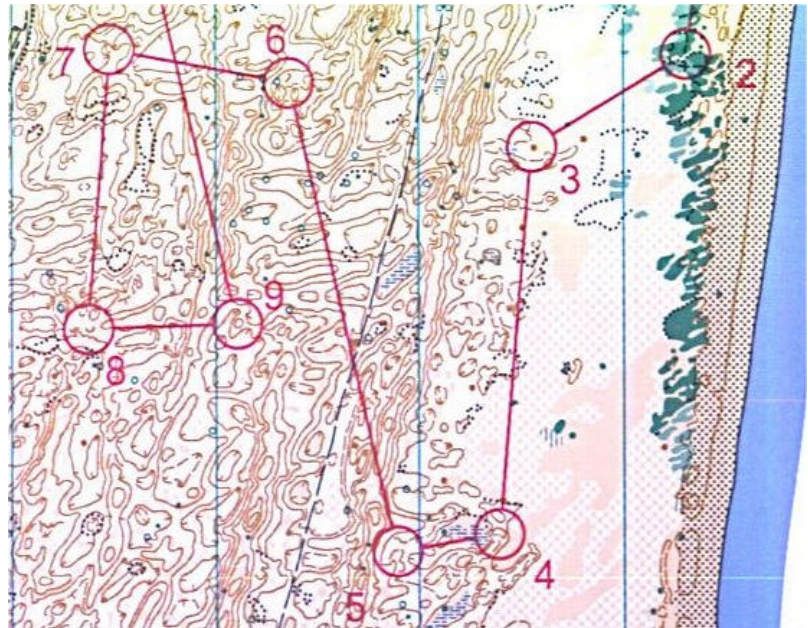
1. トレーニングキャンプ & モデルイベント

経験年数の少ない日本のジュニア選手にとって数多くの異なるタイプのテレインを経験することの意義は大きい。大半の人にとって初めての海外テレインになるトレキャンはそういう意味で毎年採用しているプログラムである。今年は全く異なる2種類のテレインが使われるため以下のスケジュールを設定した。

1日目 あまり経験のない海岸防砂林でのトレーニング（ショート競技対策）

2日目 セミオープンな岩山テレインでのトレーニング（クラシック競技対策）

3日目 現地のローカル大会への参加



海岸テレインは、その大半が極めて見通しの良い松林であり、等高線間隔が2.5mであったにも拘わらず地形把握も問題は少なかった。但し道やオープン部分を中心に砂地が散在するためこれを如何に走り抜けるかが秒差を争う選手にとっての課題に思えた。一方では海岸寄りに極めて密度の濃い松林が点在しており、その隙間を抜けながら方向維持を図ることはなかなか困難であった。毎日のミーティングでCPとして使えるもの、使えないものなどの情報交換を行い知識を共有した。

また連日日差しの強い天候が続いたため水分補給など猛暑の中でのレース対策も課題として残された。

2. ショート競技

今年は男子で2回目出場の久野が激戦のヒートで見事にBファイナル進出を果たした。久野は4.55kmのコースを31分で走り、これはキロ7分を切るタイムでトップ比131%に相当する。これは昨年山田が出した記録とほぼ同じであり、今後の日本選手の一つの目標数値になろう。

<女子>

氏名	順位	タイム	トップ比	コース
Pinja Satri	1- 1	0:23:35	100%	3550m
A-final	1-20	0:31:59	136%	65m
B-final	1-40	0:55:47	237%	11c
塚八ゆかり	1-40	0:55:47	237%	
下村佳奈	1-42	1:10:27	299%	
M.Gorchkova	2- 1	0:22:24	100%	3450m
A-final	2-20	0:31:32	141%	65m
B-final	2-40	0:48:08	215%	11c
花木睦子	2-41	0:50:12	224%	
中野真希	2-43	1:09:27	310%	
A.Skrastina	3- 1	0:22:24	100%	3500m
A-final	3-20	0:29:34	132%	60m
B-final	3-40	0:39:32	176%	11c
川島沙耶香	3-40	0:39:32	176%	
櫻井優子	3-42	0:59:14	264%	

<男子>

氏名	順位	タイム	トップ比	コース
L.Ebneter	1- 1	0:23:39	100%	4550m
A-final	1-20	0:26:07	110%	85m
久野雄介	1-39	0:31:04	131%	16c
B-final	1-40	0:31:11	132%	
山田高志	1-51	1:18:09	330%	
M.Müller	2- 1	0:24:49	100%	4500m
A-final	2-20	0:28:43	116%	90m
B-final	2-40	0:34:57	141%	16c
横山友彦	2-46	0:43:11	174%	
小林恭輔	2-48	0:47:50	193%	
M.Sirmais	3- 1	0:23:58	100%	4550m
A-final	3-20	0:29:56	125%	80m
B-final	3-40	0:38:44	162%	16c
楠本俊壮	3-43	0:40:07	167%	
濱田尚	3-47	1:02:08	259%	

ショート競技予選

男子では楠本がB ファイナルまであと1分半と健闘。また昨年B ファイナル進出を果たして期待された山田

はゼッケン紛失で不本意な結果に終わった。

女子は最終的には人数の関係で全員B ファイナルに出られることにな

ったが、もともと設定された条件では塚八と川島が40 位で通過順位だった。しかしいずれもトップ比が大きく世界との差は大きい。

ショート競技決勝

<女子>

氏 名	順位	タイム	トップ比	コース
M. Kauppi	A- 1	0:22:42	100%	3800m
M. Florkowska	B- 1	0:21:39	100%	3700m
川島沙耶香	B-62	0:35:53	166%	55m
櫻井優子	B-63	0:36:34	169%	13c
下村佳奈	B-66	0:38:21	177%	
塚八ゆかり	B-69	0:41:53	193%	
花木睦子	B-70	0:43:46	202%	
中野真希	mp	mp	mp	

<男子>

氏 名	順位	タイム	トップ比	コース
E. Anderssen	A- 1	0:22:54	100%	4650m
M. Krawczyk	B- 1	0:21:42	100%	4300m
久野雄介	B-52	0:28:50	133%	75m
J. Goubau	C- 1	0:20:51	100%	3700m
横山友彦	C-13	0:24:16	116%	60m
山田高志	C-16	0:26:01	125%	
濱田尚	C-17	0:26:07	125%	
小林恭輔	C-18	0:26:10	125%	
楠本俊壮	C-28	0:32:03	154%	

久野は決勝でも同様のコースをほぼ同じトップ比で回って52 位に入った。最後にちょっとしたミスをしており、B ファイナル中位までは射程距離であることを示してくれた。

女子は奇しくも日本、韓国、香港とアジア勢の下位争いとなったが、その中から韓国代表である東京女子大の車が頭ひとつ出てアジアトップの成績を残した。中野のmp はパンチ時の音と光の確認を行っておらず、SI カードに記録が残っていなかったものである。



ショート競技終了後の山田選手。アメリカ選手と話をしています。

3. クラシック競技

今年の男子は久野と山田がトップ比137%を記録。これはここ数年切れなかった150%の壁を一気に塗り替えるものであり、JWOC 参加2 回目です。ここまで行くことを示してくれた意義は大きい。2 人の影に隠れて目立たなかったが横山も145%と好成績を残し、この3 人によるリレーの結果に期待が寄せられた。

女子は下村がショートでの鬱憤を晴らすかのような走りで、川島、花木が秒差でこれに続いた。特に会場から丸見えのラス前からのゴールまでの区間で、先行するドイツ選手を下村が抜いて逃げ切った様子は見ているものを喜ばせた。

クラシック表彰式



世界のトップは男子がキロ6分、女子でも7分強で走ってしまう。2位以下も秒差で続くのが現実だ。今年は幸いにもスウェーデンチームと同

宿だったことで、トップ争いをする選手たちのレース当日の朝の様子を観察できた。コーチを中心に集中を図る選手たち、その周辺に漂う緊張

感に接して、日本選手たちは何を感じたのだろうか。

クラシック競技

<女子>

氏 名	順位	タイム	トップ比	コース
T.Kivimaki	1	0:50:08	100%	7000m
M.Przyczkova	2	0:50:14	100%	160m
M.Kauppi	3	0:51:10	102%	13c
下村佳奈	112	1:26:47	173%	
川島沙耶香	113	1:27:25	174%	
花木睦子	114	1:27:46	175%	
櫻井優子	123	1:40:32	201%	
中野真希	125	1:46:02	212%	
塚八ゆかり	126	1:58:41	237%	

<男子>

氏 名	順位	タイム	トップ比	コース
D.Hubmann	1	0:59:35	100%	10000m
W.Kowalski	2	0:59:57	101%	300m
A.Bortnik	3	1:00:00	101%	18c
久野雄介	111	1:21:35	137%	
山田高志	112	1:21:56	138%	
横山友彦	127	1:26:26	145%	
濱田尚	136	1:33:11	156%	
小林恭輔	142	1:43:50	174%	
楠本俊壮	144	1:46:55	179%	

4. リレー競技

今年もリレーメンバーと走順は、尾上秀雄、藤井範久、伊藤恭子、志村直子のオフィシャル4人で選手の可能性や特性を総合的に評価して決定し、トレキャン最終日に発表した。

	1走	2走	3走
男子Aチーム	山田	久野	横山
男子Bチーム	小林	濱田	楠本
女子Aチーム	下村	塚八	櫻井
女子Bチーム	川島	花木	中野

リレーに臨むに当たって前夜に作戦会議を行い全員にチーム目標・個人目標を紹介してもらった。それに先立ち、クラシックでの国別上位3名のタイムを藤井コーチに計算してもらい、負けられない国、勝ちたい国などをピックアップしていたのだが、クラシックで日本より良い成績だったスロベニアの男子選手が「日本には負けられない」と言っていたという話が伝わって来て、それなら何が何でもスロベニアには勝とうというのが男子の絶好の目標になった。

女子は具体的な国との勝ち負けより、各自がそれぞれ自分なりのレースをすることを差し当てる目標にするということで終始した。

リレーコースは3つのループから成り、コントロールは異なるが2度観戦エリアから見える場所を走るレイアウトになっていた。第2ビジュアルをトップ選手が通過してからひ

としきりした後、まず山田が通過して日本チームは一気に盛り上がる。と、その1分後くらいに小林も通過。大健闘だ！ 2走の久野と濱田が相次いでタッチゾーンに向かう。5～6分後に山田がゴールし、今大会絶好調の久野が出て行く。しかし小林が来ない。最後でちょっとミスをしたようだがそれでも好タイムで濱田にタッチ。



一方女子の方は第1ビジュアル、第2ビジュアルとも下村が快調に先行する。1分遅れて川島、さらに遅れて車という順だ。香港チームはかなり遅れている。第2ビジュアルの坂を一気に駆け上がって行ったのは下村だったが、先にゴールに現れたのは最終パターンが有利だった川島だった。花木、塚八と相次いで出て行き期待がつながる。

男子2走の久野は本人コメントではやや不本意な出来だったということだが山田に次ぐタイムでゴール。この時点でスロベニアとの差は数分、最後の横山に目標達成の期待が掛かる。濱田は前半で少しずつロスをしたようで第2ビジュアルに現れた時にはスイスの3走が1分後に迫っていた。本人も放送や声援で分かっていたようで、最後を頑張ってスイスのウイニングランから辛くも逃げ切りゴールした。

女子2走の花木はこの日一番のタイムで走りゴールする。大きなミスはほとんど無かったようだ。すばらしい！ Bチームのアンカー中野が出て行く。一方、Aチームは期待の塚八がなかなか帰って来ない。ゴール後の話では川沿いのやぶに突っ込んだり、ミスルートをしたりとさんざんだったようだ。しかしウムにはならず3走の櫻井にタッチ。

男子Aチームは横山が好タイムで飛び込んで来る。結局、スロベニア、ポルトガル、ホンコン、さらには失格となったリトアニア、フランス、ラトビアにも勝利となった。楠本がびっこを引きながら帰って来た。最初は崖から落ちたと聞いたので心配したが、救急所のドクターに見てもらって大禍ないことがわかりまずは一安心する。

コーチは全員オフィシャルランに出たため女子3走の結果は後から聞くことになったが、さすがに周りに誰もいない時間帯でもあり好タイムは出せずに終わったようだ。

韓国代表の車はM I Xチームで走ったのだが、快走した2走のベルギー選手に日本代表はA、B両チーム

とも逆転され、3走のアイルランドにもそのまま逃げ切られた。

男子AチームはJWOC日本チームとして初めて最後までリレーらしいレースが展開でき、タイム的にもトップ比140%、国別順位で25位というこれまでのベストを記録した。今後の目標ともなるべき数値である。

<記録>

男子A 26位/53チーム 25位/国
男子B 42位/53チーム 28位/国
女子A 37位/42チーム 23位/国
女子B 38位/42チーム 24位/国

上位は男女ともスイスのアベック優勝。また2位、3位も男女同じだった。

1位 スイス

リレー競技

2位 フィンランド

3位 スウェーデン

こうして JWOC2002 は終了した。選手たちがこの経験をどう生かすかはこれから各人に託されることになる。目標を持って挑戦しつづければ必ず進歩がある。それを信じて続けて欲しい。秋以降に活躍する選手達を見るのがオフィシャル達の願いでもあり楽しみでもあるのだ。

JWOCの選手たちの遠征に際してはOB、OGの方々を始め、本当に多くの人たちのご協力・ご支援を頂いた。この場を借りてお礼申し上げますと共に今後もこの選手たちの活躍を是非見守ってあげて欲しい。

<女子>

氏名	走順	タイム	タイム計	トップ比
Switzerland	1		1:42:14	100%
Finland	2		1:42:44	100%
Sweden	3		1:46:09	104%
川島沙耶香	B-1	1:03:01		
花木睦子	B-2	0:55:04		
中野真希	B-3	1:29:19	3:27:24	203%
下村佳奈	A-1	1:05:05		
塚八ゆかり	A-2	1:07:11		
櫻井優子	A-3	1:28:37	3:40:53	216%

<男子>

氏名	走順	タイム	タイム計	トップ比
Switzerland	1		1:55:03	100%
Finland	2		1:56:50	102%
Sweden	3		1:57:45	102%
山田高志	A-1	0:51:22		
久野雄介	A-2	0:54:04		
横山友彦	A-3	0:55:37	2:41:03	140%
小林恭輔	B-1	0:54:29		
濱田尚	B-2	1:00:13		
楠本俊壮	B-3	1:12:26	3:07:08	163%

5. アジア圏からの参加

今年はアジア圏から香港が初めて参加した。男女各3名の選手+オフィシャル1名の参加でレベルもまだまだだが、今後に向けて前向きな姿勢が感じられた。韓国は今年はチームを送らないという方針であり、東京女子大に在籍で韓国籍の車の出場希望が最初はすんなり認められなかった。オーガナイザに交渉しても韓国OL協会の承認が必要だということで、最終的には私がオフィシャルを兼任することで韓国からの推薦状を取り付けることができた。本人の希望も入れて日本チームの強化合宿、トレキャン、本戦すべて行動を共にしてもらった。日本チームにとっても良い刺激になったことと思う。同じアジア圏で輪が広がることは2005年に向けても望ましいことなので、今後も可能な範囲で連携を取っていききたい。(おわり)



